

悠久の京を訪ねて Part IV Vol.5



KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER

京は古より人々が集い、その気候・風土の中、人々の生活が営まれてきました。

京都府内の遺跡で多数発掘された出土品により、縄文・弥生時代までさかのぼり、当時の様子を知ることができます。

私たちが住んでいる地域にはどのような歴史があったのか、出土した資料を基に過去の文化やその発祥の歴史を訪ねましょう。

中国からもたらされた華南三彩男子像

■幘を被った男子像

平成5年に行われた京都府庁西別館建設に伴う発掘調査で、安土桃山時代から江戸時代初めの男子像が出土しました。残存する頭部の長さは4cmです。

中国の明代における男子は、頭巾のような幘すきんと呼ばれる被り物で頭部を覆うことが一般的で、出土した男子像にも幘が表現されています。幘には緑色の釉を施し、巻き上げられた布には黄色と褐色の釉が見られます。また、顔面は素焼で眉と眼、髭、そして髪を墨描きし、幘と額の間には朱で線が描かれています。

これらの釉は、中国福建省泉州付近で明代に焼成された華南三彩の釉と共通していることから、中国南部で焼かれ、中国との貿易によって京にもたらされたと考えられます。今のところ、国内で唯一の出土例とみられます。



男子像の正面



男子像の左側面



男子像の後



京都府庁

■勘兵衛と茶屋四郎次郎の間で

男子像が出土した調査地は、「上京区勘兵衛町」にあたります。発掘調査では、地下式の石室や数多くの井戸、町境の柵跡などを確認するとともに、安土桃山時代から江戸時代初めにかけての美濃、志野、瀬戸、織部、唐津焼などの焼きものをはじめ、漆器や下駄、基石、中国製磁器、華南三彩盤、金箔瓦などの遺物が数多く出土しました。このようにいろいろな種類の遺物が出土することは、非常に珍しく、経済力を有した人物の居住を示しています。

さて、「勘兵衛町」の町名は、慶長年間(1596~1615)に京で経済的に豊かであった三勘兵衛の一人が居住していたことと関係しています。一方、調査地の北側には、朱印船貿易で知られた豪商である茶屋四郎次郎の屋敷が所在しています。

想像をたくましくすると、隣人の貿易商である茶屋四郎次郎から調度品として勘兵衛が入手し、勘兵衛の屋敷跡からの出土にいたったのではないかと考えられます。